慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート・ C・ ノース著『國民黨と中國共產黨の指導者』
Sub Title	Robert C. North : Kuomintang and Chinese communist elites
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1954
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.27, No.1 (1954. 1) ,p.59- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19540115-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Robert C. North: Kuomintang And Chinese Communist Elites,

1952. pp. 130. Stanford University Press.

ロバート・C・ノース著

『國民黨と中國共産黨の指導者』

一

本書は、The Hoover Institute and Library on War, Revolution and Peace によつて行われている Elite Studies の一部をなすものである。このシリーズは、過去約六十年にわたる世界各國の指導者の社會的基盤と構成上の變化とを種々の角度から分析し檢討することによつて、その社會の基本的特質を理解し、現代革命の性格と課題とを明らかにしようとしたものであつて、本書もまたこのような立場から、主として中國國民黨及び中國共産黨の指導者層について、その發展過程及び社會的經濟的背景を詳細に分析し、中國革命の性格・革命における共産黨の勝利の原因を究明する手がかりを得ようとするものである。

いつたい、一國における政治指導者の研究が、その國の社會構造の特質を理解し、ひいては革命の性格を明らかにするうえに重要な意味をもつていることはいうまでもない。このことは、政治指導者の研究が以上の目的を達成するための第一義的な方法であることを意味するものではないが、かれらの存在そのものがその國の社會の構造的特質をはなれてはありえない以上、この種の研究のもつ重要性はなんとしても認められなければならないであろう。從來、わが國においても、政治指導者に關する研究が行われなかつたわけではない。しかし多くの場合、その研究は、個人を對象とするそれにとどまり、指導者を全體として綜合的且つ科學的に分析し檢討した研究はそう多くなかつたように思われる。とくに中國の研究においては、中國共産黨及び中國國民黨に對する研究成果は數多く存在するにもかかわらず、本書のように國共兩黨の指導者を種々の觀點から總括的にとり扱つたものはほとんど存在しないといつても過言ではないのである。後述するように、問題とされなければならない點はあるにしても、以上の意味で本書のもつ價値は相當高く評價されてよいように思われる。

二

本書は全部で五章から成り立つている。參考のためその項目を列擧すると、

第一章　帝國指導者の崩壞

　西歐の衝擊・共産主義の影響

第二章　國民黨における指導の發展

第一期―第六期中央執行委員會・全體的傾向
第三章　中國共産黨における指導の發展
陳獨秀の指導（一九一八年―一九二七年八月）・初期共産黨の組織・國共合作・都市暴動の時期（一九二七年八月―一九三一年一月）・ロシア留學生の時期（一九三一年一月―一九三五年一月）・指導の第四期・全體的傾向
第四章　國共兩黨指導者の社會的特質
共通の特質・相違點
第五章　人民政府下の發展
强味と弱味・個々の指導者の背景と特徴・中華人民共和國
――である。

このうち著者が最も力を注いでいると考えられるのは、いうまでもなく國共兩黨指導者の性格を分析した第四章であつて、他の四章は第四章に對して補足的關係にあるといつて差支えないであろう。そこで、第四章に重點をおきながら以下順次に各章の內容を簡單に紹介することにしよう。

第一章において、著者は、まず清朝末期における政治組織と指導者の社會的背景の分析とを行い、一部指導者のなかには西歐文明の採用による中國近代化への動きがあつたにもかかわらず、清朝の政治機構と指導者のもつ傳統的な保守性・非能率及び新たな情勢に對應する適應能力の不足などが、西歐勢力の衝擊に中國を有效に對處させることを不可能にし、廣汎な社會的混亂をひき起すに至つたとの見解を明らかにし、ついでこのような中國社會の混亂のなかから生れた國共兩黨に對してソヴィエトコムユニズムがあたえた重大な影響を歷史的に概觀し、一九二四年の國共合作に及んでいる。この章は、本書の研究對象である國共兩黨を歷史的に理解するためのいわば序說的な部分に當るものであり、とくに問題となる點は見當らないが、本章の末尾で言及されている國共兩黨の指導者の性格に關する概括的な敍述は、第四章に示された著者の見解を整理し理解するうえに有益なものとして注意する必要があろう。

第二章は、一九二四年の中國國民黨第一屆全國代表大會から一九四五年の第六屆全國代表大會に至るまでの各大會で選出された中央執行委員會のメンバーにつき、黨派的な構成上の變化を歷史的に檢討することによつて、蔣介石の獨裁權力が次第に國民黨內で確立されていつた過程を明らかにしている。すなわち著者は、第一期及び第二期中央執行委員會においては、汪兆銘の國民黨左派及び共産派の連合勢力が西山派を中心とする右派に對して優越的地位を占め、黨內の指導權を掌握していたが、第二期中央執行委員會時代の中期以後蔣介石派の勢力が擡頭し、中山艦事件（一九二六年三月）・四・一二クーデタ・北伐の完成を經て一九二九年三月の第三期中央執行委員會に至つてその權力がほぼ確立された、としている。しかし、この時期は、なお黨內に種々の强大な異質的勢力を有していたために、反蔣鬪爭にみられるように多くの黨內鬪爭をひき起したが、一九三一年十一月の第四期中央執行委員會の成立當時になると、蔣介石派は西山派及び保守的中央執行委員を擁して汪兆銘・胡漢民などの勢力に優越し、さらにその後對外的危機の切迫と相俟つてその覇權を樹立するに至つたのである。この傾向は、一九三五年十一月の第五屆全國代表大會にひきつがれ、蔣派は軍人出身の中央執行委員及びC

C團系委員に政學會派を加えてさらにその勢力を強化し、一九三八年の臨時全國代表大會では蔣介石は國民黨總裁に選出され、國民黨内における事實上の權力獨占を達成したのである。著者は、以上の事實を檢討した結果、㈠黨内各派の構成上の變化が行われたにもかかわらず、共産黨員を除き最初の中央執行委員の九〇パーセント近くが六全大會當時にもなお生存し、その大部分が依然として指導的地位にあり、黨の指導は全體として安定的であつたこと ㈡國民黨の指導の歴史は一九二六年以後は蔣介石の擡頭と切りはなしては考えられず、その權力强化にはとくに日本の中國侵入が大きな役割を果していること ㈢しかし蔣介石の獨裁的權力の確立は、黨内の批判的政治勢力を後退させ、人民大衆の要求を無視することによつて國民黨を大衆から遊離させてしまつたこと――を結論として述べている。この㈢の見解は、著者が中國の要求する歴史的課題を正しく解決しえなかつたところに國民黨沒落の根據を求めたものとして高く評價されなければならないであろう。また著者は、前述したように、蔣介石の權力確立がCC團系との結合のうえに行われたことを指摘しているが、このことは、蔣派の中心勢力が軍人であることと相俟つて、國民黨指導勢力の極端な右傾化を招來した有力な原因をなすものであり、その社會的基盤を分析した第四章とともに十分注目されなければならないところであろう。

第三章は、中國共産黨における指導勢力の變遷過程をとり扱つている。すなわち著者は、黨成立の時期から現在に至るまでの歴史を四つの時期に區分し、黨の指導權が陳獨秀・瞿秋白・李立三・陳紹禹などを經て、さらにはまた張國燾との抗爭を經て次第に毛澤東に移つていく過程を、黨の革命戦略の變遷との關連において詳細に觀察している。この間の敍述は極めて要領よくまとめられており、參考となる點も少くないが、とくに指摘されなければならないことは、著者が黨史の時代區分の一時期として都市暴動の時期（一九二七年八月―一九三一年一月）を擧げていることであろう。この時期は一般に李立三時代として知られているものであるが、都市暴動主義に立つ李立三の革命コースの誤謬を指摘する場合、わが國においては、黨が一九二八年七月の六全大會で毛澤東コースへの基礎を確立していたにもかかわらず李立三はこれを正しく理解せず左翼機會主義的誤謬をおかしたとして非難するのが普通であるが、著者はこの點について、李立三時代が一貫して都市暴動主義の時代であり、中國共産黨の指導に當つていたコミンテルンすら毛澤東コースに對して明確な認識をもつていなかつたとして、完全に反對の見解を示している。この事實は、一九二八年から三四年にかけて共産黨員の構成が激變し、農民化への傾向が顯著になつたこと、毛澤東の指導的地位の確立は以上の事實に表現される中國革命の性格を彼が早くから理解し實踐していたことによるものである、と主張する著者の見解とともに愼重に檢討されなければならない問題であろう。

ついで著者は、第四章において、多くの統計資料を驅使して國共兩黨の指導者の社會的背景の分析を行つている。それによると、國共兩黨の指導者に共通な社會的特徴として、㈠兩黨の指導者は大部分が中國人民の上層階級すなわち地主・商人・學者・官僚などの子弟であり、西歐勢力の侵透の激しい地方の出身者で高度の教育を受け、しかも中國社會の主流に容れられなかつた人々であること ㈡

教育の程度も、海外留學を行つていることについても概して共通していること　㈢指導者の年齢は一般先進諸國家のそれに比べて若いこと　㈣概ね職業的革命政治家であること　㈤兩黨とも指導者を送り出す社會層については（國民黨の場合には軍人を除きその經濟的地位についても）全體として下降的現象がみられること　㈥軍人の指導的地位への進出が顯著であること――などが擧げられている。これらの諸特徴は、中國のような後進的植民地國家における革命がどのようなかたちにおいて發生し且つ發展するものであるかを示すものとして頗る興味深い。しかしわれわれにとつて更に興味ある問題は、このような共通の特徴をもつ、いいかえれば一應は共通の歴史的基盤のうえに生れた國共兩黨が、その社會的性格において、どの點で相違しているかということである。著者は、これについて、最も重大な相違として國民黨指導者の都市化と共產黨指導者の農村化とを擧げている。前述したように、兩黨の指導者は、もともと上層階級に屬するものが大部分を占めているのであるが、その場合でも共產黨に國民黨よりも農村出身者の比率が大きく、國民黨に共產黨よりも都市商人・學者・官僚の子弟の占める割合が多かつたのである。この傾向はその後次第に擴大されていつたが、とくに共產黨がソヴィエト革命の時代に入り毛澤東を中心とする農村工作が活潑となるにつれて共產黨指導者の農村化は一段と顯著となつた（前述した指導者の社會層における下降現象は共產黨の場合この點で著しかつたのである）。また一方、國民黨においても、都市商工業を社會的基盤とする右派――たとえばCC團系――の擡頭によつてその都市化が促進されることとなつた。かくて著者は、國共兩黨指導者の統計的分析の結果は一言でいえば分極現象であると結論する。そして都市化した國民黨が勤勞大衆とくに農民から遊離して中國革命の課題を擔いえなくなつたのに對し、共產黨は農民を基盤とする革命組織に發展し、國共內戰における勝利への基礎をきずいた、としているのである（著者はこの外にも、共產黨指導者にはソヴィエト連邦及びフランスに留學したものが多く、日本及びアメリカへの留學生には國民黨指導者が多いことを指摘している）。これは今日とくに目新しい見解とはいえないにしても、中國革命の基本的性格にふれた見解として注目すべきものであろう。

最後に、第五章は、最近における國共內戰を經て中華人民共和國が成立するに至つた歴史的過程を追求し、そこに見出される國共兩黨の强味と弱點とを概觀するとともに、中國共產黨の現指導者の各々について若干の解說を試みている。著者は、本章の最後の部分において、「その全體主義的方法にもかかわらず、中國共產主義制度は、それが自己の教義を中國人の基本的要求に適應させようとし、またそうすることができるならば、長く權力を維持しつづけるであろう」と述べ、中華人民共和國の將來に對する態度を明らかにする一方、中ソ關係については、中國共產黨とコミンテルン及びソヴィエト連邦との歴史的關係から判斷して、兩者間の對立は「まだ發展してはいないにしても、結局は殆んど確實に現れてくるであろう」ことを豫想している。

以上が本書の概要である。本書のもつ價値についてはすでに述べたからここでは再言しないが、この紹介を終るに當つて本書に對す

る不滿を一つだけ述べておこうと思う。それは著者の使用している資料の問題である。著者は、序文において述べているように、かなり廣汎な英文資料に加えて、國共兩黨指導者と密接な關係にあつた人々の報告を合せ利用している。しかし、ここに見出される資料は、著者の究明しようとする課題を解決するためには決して十分とはいえないように思われる。この事實は、たとえば、國共兩黨指導者の社會的特質を分析するに當つて、國民黨については一九二四年・二六年・二九年の中央執行委員會の資料だけが數多く利用され、最近のそれが殆んど用いられていないことにも明白に現れている。もちろん、この種の資料を十分に蒐集することは極めて煩雜な仕事ではあるが、差當り本書に使用されている資料を相當程度まで補充することはそれほど困難なことではないように考えられる。本書は、そうすることによつて、より充實した內容をもつようになるであろう。

（石川忠雄）